

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 5月30日現在

機関番号：32644

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22520631

研究課題名（和文）ドラマを教育ツールとする言語発達の研究

研究課題名（英文）Study on the emergence of language development when drama performance is used as an educational tool

研究代表者

鈴木 広子（SUZUKI HIROKO）

東海大学・教育研究所・教授

研究者番号：50191789

研究成果の概要（和文）：本研究は、英語のドラマ・パフォーマンスを行った英語学習者の言語獲得過程について考察することが目的である。「獲得」は、言語知識の「習得」とは異なるプロセスを通る。ドラマの準備段階で、学習者が資料を読んだり、他者と関わりながら「役の自分」の姿を明らかにしていく過程で、媒介する言語が発達することである。視察した教育プログラム、さらに、実証研究を通して、学習者の獲得過程は、言語を学ぶモチベーションにもつながることを実証的に明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This research project explored the nature and extent of L2 appropriation when drama is used as an educational tool, the process of “appropriation” being distinct from that of the “acquisition” of linguistic knowledge. In preparing for dramatic performance, through the process of identifying a character as the “self,” learners read resource materials and interact with other participants, developing language as a mediating tool in communication. Insights from interviews and observation of various educational programs and drama performance projects confirmed the outcome of this qualitative inquiry, which describes learners’ appropriation processes, as well as their enhanced autonomy and motivation.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2011年度	700,000	210,000	910,000
2012年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,000,000	900,000	3,900,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学

キーワード：英語教育一般・ドラマ教育・状況論・identity・autonomy

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 高いコミュニケーション能力の育成が求められている一方、中学・高校の英語の授業では、生徒のモチベーションが低いという現状の中で、生徒にとって意味のある学びと達成感のあるプロジェクトを提案したいと考えた。

(2) 「人が活動に参加し、道具を媒介として他者と関わり合う過程が学びである」という社会文化的アプローチから、言語学習の概念を捉え直した。その結果、英語・コミュニケーション能力の伸長を、言語の「習得」ではなく「発達・発生」へと視点をシフトして観

ていく必要があるという考えに至った。

(3) 本研究が対象とする教育は、中等教育レベルの英語教員の研修プログラム、および中学・高校の英語の授業である。

中学・高校の英語の授業においては、年々学ぶことのモチベーションが低く、基礎的な語彙・文法といった言語知識を習得していない生徒が多くなっている。高校の教科書は、中学の基礎的な英語力を前提として、社会問題や科学的トピックを扱った英文が並び、学習指導要領は、コミュニケーション能力の育成を強調している。このギャップは、高校生の英語に対する嫌悪感や苦手意識によって授業を回避する姿勢を助長し、英語教員は授業が成立しないことに苦悩している。

このギャップを埋める1つの鍵は、生徒にとって意味のある言語活動を提供し、その活動への参加を通して、生徒が充実感や達成感を得ることである。そこで、ドラマ・パフォーマンスという教育的ツールを取り入れ、コミュニケーション能力の育成を目的とし実践を試みることにした。

これまで、状況が明確で、段階的に学習者の主体的な参加を必要とする一連の活動を教育モデルとして、教員研修会の講師、教育改革事業のアドバイザーとして提案してきた。そのモデルを基盤として設計したプロジェクトの1つが、本研究が対象とするドラマ・パフォーマンスである。

(4) ドラマ・プロジェクトにおいて、学習者は、登場人物が話すセリフの意味、他の登場人物との関係、過去からの文脈を背負った登場人物の状況、態度や服装など言語外に現れる登場人物の人となりを理解する。学習者のレベルに応じて、英語の参考文献を読むこともある。そして、登場人物を「自分」(Goffman, 1959)に取り込み、自分のことばとして英語のセリフを「話す」。このようにして「話す」行為は、トマセロが言語コミュニケーション能力として必要だと説明する「役割交替を伴う模倣」(Tomasello, Kruger, and Rather, 1993)の経験を意味する。つまり、ドラマ・パフォーマンスの練習から最終演技までの過程で、自分と他者の意図とゴールを共有し、他者の役割と自分の役割が明確な関係の中で、状況的に適切な「英語」を理解し表現することを経験することになる。

## 2. 研究の目的

(1) 欧米で先進的なドラマ教育が行われている国内外の教育・研究機関を調査し、教育プログラムおよび授業を視察し、企画・運営している研究者およびスタッフと面会して、ドラマ教育の意義・意味に関する知見を広げる

(2) ドラマ・パフォーマンスを教育ツールと

する英語教育において、学習者の英語、学びの質、学びへの姿勢がどのように変化するかを分析し、活動の道具として英語を使う教育の意味、コミュニケーション能力の概念、評価の視点を可視化する

(3) 研究の成果を応用したドラマ・プロジェクトを、教員研修プログラム、公開ワークショップ、教育改革事業において実施し、英語教育における「生きる力」の育成、人間教育の意味を社会に啓発する。

## 3. 研究の方法

(1) 以下の教育プログラム、プロジェクトを視察した。

### ① 沖縄

目的：ドラマ教育に関する資料収集、コミュニケーション教育としてのカリキュラム・教授法研究、企画者インタビューを行う。

目的地：沖縄国際大学、南城市文化センター

### ② アメリカ合衆国、ニューヨーク

目的：ドラマ教育の実践を視察し、ドラマ・パフォーマンスを通して、学習者がどのように共感的な関係性およびコミュニケーション能力を発達させるかを考察する。

目的地：

52番街プロジェクト—子どもが制作したドラマにプロの俳優が演じて見せるプログラム

New Victoria Theater—歴史的な建造物であるこの劇場を使った市の教育プログラム

Bart College—一般の学生に対するドラマ演技コース

ニューヨーク州立大学—大学院プログラム、Cardona 教授のインタビュー

### ③ 台湾

目的：台湾の英語の授業でよく使われる

Readers Theater (RT：朗読劇)を視察する。生徒の言語、コミュニケーションスキルの向上および主体的な学びの促進を目的として、どのような実践を行っているかを研究する。

目的地：明正 (Mingheng) 小学校—朗読劇の教育実践のリーダー的存在である Archie

Yang 教諭をインタビュー

新港 (Shin-gang) 小学校—Sarah Weinstein 先生の授業視察と他の教員を交えたチーム・

ティーチングについてのインタビュー

### ④ イギリス、ロンドン

目的：イギリスの学校では、ドラマを教育ツールとした授業がいろいろな科目で実践されてきた。ドラマを使った教育を視察し、それが人間教育、第二言語教育にどのように応用されるかについて、教員と学生に話を聞く。

目的地：バーミンガム大学演劇・舞台美術科

一演技と演出の専門家であるアダム・レッジャー (Dr. Adam Ledger)氏と面会し、彼の授業を参観

ロンドン大学スピーチ&ドラマ・セントラル・スクール応用演劇科－社会問題に対する意識や判断力を育む社会教育にドラマ教育を活かすプログラムを視察

(2) 2011 年度東海大学学園オリムピックの英語部門で実践されたプロジェクトを対象に事例研究を行った。

①プロジェクトの概要：このプロジェクトは、参加者にリーディングやスピーキングなどの4技能を統合的に使った活動を経験させるねらいがある。5泊6日の合宿形式で、参加者は、東海大学附属諸校の中学生と高校生の有志が応募し、アセスメントによって22人が選出された。5人の外国人教員、8人の高校英語教員、4人の学生助手が、彼らとともに6日間を過ごした。

②プログラムと教育的意味：事前課題を含め、本研究チームが企画、設計した表1のようなプログラムを全て英語で行った。

表1 ドラマ・プロジェクトのプログラム

Day 2	Day 3	Day 4	Day 5
<b>Drama 2:</b> 音楽・即興・感情 <b>Drama 3:</b> オーディションとキャスティング	<b>Drama 6:</b> セリフの解釈	<b>Drama 9:</b> リハーサル	<b>Drama 12:</b> 映画鑑賞 振り返り
<b>Drama 4:</b> 物語と登場人物の理解	<b>Drama 7:</b> シーンの解釈：特徴	<b>Drama 10:</b> 演技改善、衣装合わせ	<b>Assessment tests:</b> ドラマに関するリーディング・ライティング・テスト
<b>Drama 5:</b> 台本とシーンの理解	<b>Drama 8:</b> 練習	<b>Drama 11:</b> 実演	合同発表会
<b>Reflection 2</b>	<b>Reflection 3</b>	<b>Reflection 4</b>	<b>Reflection 5</b>

このプログラムは、参加者がセリフや登場人物を資料から理解し、自分がその人物の中に入って多角的に考え、人物像や状況を明らかにしていくように設計している。各セッションを重ねていくうちに、参加者は他者と話し合い、互いを理解し、ときには発見を伴う学びを経験する(外化)。そして、リフレクション・シート(reflection sheet)に書き込みながら自分自身の理解を深め、認識を新たにする過程も通る(内化)。この外化と内化の循環によって、状況論的アプローチにおける知識と学びの相互作用のある包括的な理解(comprehensive understanding)、「わかる」ことを経験する。

プログラムの設計は、したがって、参加者が言語学習者というより役者という視点から演じることを考えるように、工夫されている。参加者は、プロジェクトの最後には「英語を習得した」というより、登場人物として「セリフを自分のことばのように話した」という実感をもつことができれば、設計の目的が達成されたことになる。

### ③分析の方法

参加者から2人を分析の対象とした事例研究を行った。かれらのワークシート、リフレクション・シート、テストに書かれた英語のプロトコル、およびビデオ録画および教員の話合いから、かれらの6日間の行動、仲間や教員・アシスタントとの関わり方についての情報をデータとして収集し、プロトコル分析とナラティブとを組み合わせた質的研究である。

分析の視点は、以下の2点である。

- どのような過程を通して自分が演じる登場人物を理解し、セリフを習得していったか、
- チームの仲間とどのような関係性を築いたか

2人の参加者が、一連の活動の最後に行ったライティング(表1: Day 5 Assessment Test)はどのような特徴をもっているかを比較分析した。そして、2人の参加者が、演じる役と自分との統合的な結果として、アイデンティティ、L2-selfをどのように構築していくか、その役の人物としてどのような意味を生成し、その意味を言語化する過程で、どのような英語表現を自分の言葉として生み出すのかを考察した。

(3) 東海大学附属高等学校・中等部の英語教員対象の研修プログラム、同学校の地域連携教育改革プロジェクト、そして、一般の英語教員を対象とした公開ワークショップにおいて、ドラマ・パフォーマンス・プロジェクトを実施した。

## 4. 研究成果

(1)教育プログラム、プロジェクトの視察

### ①沖縄

[沖縄国際大学総合文化学部] 2008年度まで行われた国語教育のGPプロジェクトの1つとして、GPプロジェクトの代表者が沖縄文化・沖縄戦争を含めた歴史の継承を目的にドラマ「鬼慶良間」を書きおろした。それを、他の講師が引き継いで、現在でも使って授業を行っている。パフォーマンスの視点からは、歴史の中の沖縄人を共感的に理解し、また、昔のことばや戦争用語を使う経験をするなど、学生にとっては日常から離れた世界を身体で理解できるプログラムになっていた。国語教員になる学生に、関係性の強化、コミュニケーション能力の向上などの効果が表れ

ている。

[南城市文化センター] 南城市が4つの村の合併を機に地域づくりをすることを目的として、市の助成金によるバックアップのもとにドラマ・プロジェクトが実現した。

子どもから70歳近い大人まで幅広い南城市民が、沖縄の歴史や文化に触れるドラマを通して、県民意識・アイデンティティを高めるプロジェクトになっていた。

## ②アメリカ合衆国、ニューヨーク

ニューヨークで行われているドラマ教育に関する視察には、以下の目的があった。

a. ドラマ・パフォーマンスは生徒・学生の何を育成しているのかを考察する

b. ドラマ教育を行っている教員、企画者から、具体的な運営について話を聞き、資料を収集する

[52番街プロジェクト] 小中学生たちが作成したドラマの台本を使って、プロの俳優が本格的な劇場で演じるという企画である。彼ら自身の思いを物語に託している。それを、プロのドラマ・チームが、立体的、多層的（演技、美術、音響効果、コスチュームなど）な要素を統合して1つの作品にする。しかも、オーディエンスは、両親だけでなく、チケットを購入してくる一般の人々もいる。このような本格的な作成、発表過程を子ども達が体験することが、彼らの自信と希望につながっている。新しい発想のドラマ教育プログラムである。

[New Victoria Theater] エンターテイメントの街、ニューヨークならではのドラマをツールとする教育が贅沢に行われていた。New Victoria Theater はブロードウェイ・ミュージカル劇場で、最初に建てられた歴史ある、豪華な建造物である。その劇場を使ってワークショップを行うために、隣のビルに事務所を構え、ニューヨーク市の初等・中等教育レベルの学校に企画を提供し、芸術科目の1つとしてドラマでコミュニケーション活動をするプロジェクトを行っている。

52番街プロジェクトとNew Victoria Theater、どちらのプロジェクトも、学業だけでなく、家庭の問題、社会適応といった面で、問題を抱えている生徒が少なくない集団を中心としていた。教員と生徒のマンツーマンの活動ができる体制になっており、生徒が教員の注意を自分に向かせる競争をする必要がなく、安心して自分の思いを相談することができる。ドラマ教育では、生徒の声をしっかり聞くことがもっとも重要であり、その意味で、この2つの教育機関は、理想的な形を実現しており、実際、子ども達ものびのびしていた。

各教育機関は、地域の小中学校と連携し、芸術教育の一環として、このようなドラマのプロジェクトを取り入れる姿勢になってきてはいるが、日本と同じように、学校には確

固たるカリキュラムがあり、また、学力テストの点数を気にする保護者の問題も考慮しながら、徐々にこのような人間教育を学校の中に浸透していこうと、企画者らはそれぞれ苦勞されているようであり、その点は強く共感した。

## ③台湾

[明正小学校] 台湾の台本朗読(Readers Theater: RT)教育の先駆者である彰化市の明正小学校を訪ね、英語教員の楊耀琦先生の話聞くことができた。6年生のRTのクラスを参観したが、1) リーディングとスピーキングのスキルが伸長する、2) 語彙学習に効果がある 3) リーディング活動に対する動機づけを高めるという点で、その実践の効果を確認することができた。

[新港小学校] サラ・ワインスタイン (Sarah Weinstein) ALT (外国人講師) として4年間勤務し、RT教育に携わっている。日本の中学校でもRTを授業で活用できそうなヒントを得た。

## ④イギリス、ロンドン

[バーミンガム大学演劇・舞台美術科] アダム・レジャール氏と面会し、彼の授業を参観した。授業では3年生が1年生を指導、学習者がこのように演技と演出の両方を並行して行うことで、異なる2つの学びを経験する効果があるという説明を受けた。この先輩―後輩の関係性の構築は、ヴィゴツキーのZPD (最近接発達領域) (Vygotsky, 1978) 内での効果的な学びを起こしている。2年生は、身体、発声、心について気づくための多様な活動を行っていた。

[ロンドン大学スピーチ&ドラマ・セントラル・スクール応用演劇科] 社会問題に対する意識や判断力を育む社会教育にドラマ教育を活かすプログラムを視察した。4つの授業と学生主導のパフォーマンス・プロジェクトでは、学期中に読んだ理論を応用して、グループで作成した独自のドラマを使っている。とくにガーレス・ホホワイト (Dr. Gareth White) 先生の“Aesthetics of Participation” (参加の審美性) というプロジェクトでは、学生が聴衆と様々な方法でインタラクションを取っていた。

## (2) ドラマ・パフォーマンスを教育ツールとする英語教育に関する事例研究 (研究業績: 雑誌論文②)

事例研究における2人の参加者のライティング・テストのプロトコル分析は、以下のような違いを明らかにした。

生徒 M: 比較的英語力が高く、学園オリンピックへは2度目の参加だったので、このドラマ・プロジェクトでの学び方について要領を

得ていた。したがって、自分の役を理解するために、資料を読み直して文化的な背景を知り、自分なりにその登場人物になって、子どもの頃のこと、人生の問題や将来のことを考えた。

擬人的認識論の視点に立てば、これは包囲型の視点移動があった(佐伯, 1978: 215; 宮崎・上野, 1985)。つまり、役を自分の外に置き、認識対象であるその登場人物の人となりや文化歴史的背景や他者との関係性、セリフに現れる社会的立場などの多角的視点から理解しようとしていた。毎日のリフレクションの中では、1人称と3人称の主語を使ってその登場人物を描いている英文は、その役を固定し、自分の視点を移動していることを示している。しかし、チームのメンバーと話し合う様子はほとんど見られず、自分一人で役をつくっていた。結局、生徒 M は対象の外から登場人物がどういう人物かを理解し、その役に自分をはめるように演技を練習していった。

パフォーマンスを終えた生徒 M のライティング(表 1 : Day 5 Assessment Test)は、台本や他の資料から鍵となる表現を適切に利用し、また、過去形、過去完了形など文法的機能も適切に活かしているために、読みやすいエッセイになっていた。しかし、話の流れという点では、断続的であった。登場人物別に2つの年代の複数の出来事を交互に述べ、30年前のある出来事から現在に戻った生徒 M の役とインタラクションの多いもう一人の登場人物の様子を描き、最後に教訓を明らかにして自分の結論を述べている。

生徒 M は、各シーンでの出来事は正確に理解し表現しているが、生徒 M 自身が、シーンをつくる仲間とのやりとりを通して、自分の中に役のアイデンティティとその人物が生きる世界をつくるのがなかった。結局、ライティング・テストの英文は、包囲型の視点からドラマにおける出来事を客観的に理解し、述べているような特徴があった。

生徒 A : 4日間を通じて、日常生活の中でも自分の役としてふるまい、チーム・メンバーと積極的にコミュニケーションをとっていた。生徒 A の役に対する理解は、擬人的認識論における「湧き出し型」の視点活動(佐伯, 1978: 217)である。認識対象である役の中に入り込んで、その人物になりきって活動をした。外からの「包囲」だけでなく、内からの「湧き出し」型の視点移動があったからこそ、役に対して実在感のある認識が可能になり、その人物のもつ世界を自分なりに創造することができた。登場人物のアイデンティティとその世界は、仲間との関わりの中で構築できたようだった。その世界は、生徒 A の登場人物に対する理解を深め、ドラマ全体の理解にも反映された。

ライティング(表 1 : Day 5 Assessment Test)で書いた文章の英語は、文法的な誤りが多く、語彙も平易で台本やリーディング資料の英語表現をほとんど利用せず、英語の質という点で比較すると、生徒 M よりかなり劣っていた。従来の英語教育の視点から2人のライティングを評価するば、おそらく生徒 Mの方が点数が高い。しかし、本プロジェクトの担当教員2人が、評価の信頼性を確認した上で、生徒 M (15点)より生徒 A (17点)の方に高い評価を出した。

ドラマの主人公になってエッセイを書くというライティングの課題に対して、生徒 M は、ドラマのストーリー全体を概観するよりは、むしろ自分が演じたシーンに関わる内容に偏る傾向があった。ところが、生徒 A は、自分が主人公ではなかったにも関わらず、ストーリー全体を把握していて、自分の役の人生の転換点を主人公の視点から描いていたのである。

2人の対照的な結果は、パフォーマンスの深さという点において、プロジェクト参加者全体の結果を2分した。つまり、パフォーマンスという結果において、役に深く入っていた者は、教員を含め、チームの他のメンバーとのインタラクションが豊かで、ライティングでは、ドラマの全体像を把握している傾向があった。

本事例は、ドラマ・パフォーマンスという教育ツールが、言語学習を目的とする教育において、これまで言語知識の習得に焦点が当たり過ぎていた教育には何が足りないのかを示唆した。それは、人が意味を生成するほどの豊かな文脈、他者との意味交渉による場の共有そして共有世界の構築、その結果としての自分(L2-self)の構築である。

#### 引用文献

- 佐伯胖 (1987) イメージ化による知識と学習  
東洋館出版社  
宮崎清孝・上野直樹 (1985) 視点 東京大学出版  
Dornyei, Z. & Ushioda, E. (Eds.) (2009).  
Motivation, Language Identity and the L2  
Self. Multilingual Matter.

(3) 教員研修プログラム、教育改革事業、ワークショップなどへの応用

① 東海大学付属校の英語教員対象の教員研修プログラムでは、教員が学び手となり、5泊6日の夏期集中研修会において、ドラマ・パフォーマンスを行っている。研修者からは以下のようなリフレクションがある。

研修者 1 : セリフを言う練習をして、相手とやりとりをしているうちに、手などの身体的な動き、移動、モノとの関係から、言語以外

にいろいろな意味を発信しているのがわかった。また、自分が他人になることで、他人としての自分が、相手と関わる時に共有する文脈が見え、それが自分の文脈とは違うことに気づき、その上で言語を発することの難しさを感じた。

研修者2：ドラマ・パフォーマンスをすることで、英語を自然に使っている気になって、英語がうまくなったような気がする。これほどナチュラルな英語を自分のことばのようにして話す機会はありませんので、英語が自分のものになったような気がする

②教育改革事業において、対象校が公開事業やイベントを行う時に、ドラマ・パフォーマンスのプロジェクトを計画し・実施した。ドラマの準備段階からパフォーマンスまで、生徒にとって達成感が大きいこと、また、保護者や地域の住民に披露し、フィードバックを得ることで、生徒に充実感があることがわかった。準備段階での教員の時間的および労力的な負担が大きいところが問題として残る。

③2012年2月に、ドラマ・パフォーマンスを教育ツールとした公開ワークショップを行った (<http://www.ried.tokai.ac.jp/ried/files/events/entryform20130223/index4.html>)。参加者50人余りのうち、外国人教員が多かった。参加者全員が声を出し、体を動かして、活発に演じ、ディスカッションをしている様子から、知識の習得ではない新し学びについて考える機会になったのではないかを思う。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

- ① 鈴木広子、リーディング活動における状況論的理解と言語生成 Educational Development 東海大学教育開発研究所、査読有、4、2010、65-90
- ② 鈴木広子、Gary Scott Fine、ドラマ・プロジェクトにおける意味生成と言葉の発達 東海大学教育研究所 紀要、査読有、19、2011、1-28

[学会発表] (計4件)

- ① Gary Scott Fine, Peter J. Collins, EFL learner autonomy as it emerges in drama projects, 1st International Foreign Language Teaching Conference: Independent Learning, Zirve University Gaziantep, Turkey 2010年6月3日
- ② Gary Scott Fine, Peter J. Collins, Suzuki Hiroko, The reciprocal relationship of self and role: Language embodiment in drama performance, ISCAR Congress 2011, イタ

リア, ローマ, 2011年9月6日

[その他]

ホームページ等

[Performance Division, Communication Dept., RIED, Tokai University]  
<http://www.ried.tokai.ac.jp/ried/communication/performance/index01.html>

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

鈴木 広子 (SUZUKI HIROKO)

東海大学、教育研究所・教授

研究者番号：50191789

##### (2) 研究分担者

ピーター・J. コリンズ (PETER J. COLLINS)

東海大学、教育研究所・教授

研究者番号：10 327241

ゲーリー・スコット・ファイン (GARY SCOTT FINE)

東海大学、教育研究所・教授

研究者番号：10 327241